

「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に伺う。という気持ちでお届けしています。



りゅうま伝

19号

2021年6月26日

高野竜馬

「雨ニモマケズ」

6月といえば梅雨、雨が多くて嫌いな月でしたが、数年前に「聴雨」、雨の日には雨の音を聴きなさいという禅の教えを知り、天氣に意味をつけているのは自分だと気づかされて以来、歯を食いはって雨を受け入れようとしている高野です。
比自様の雨のイメージはいかがでしょうか？
そして私にとっての雨は宮沢賢治の「雨ニモマケズ」でもあります。下の版画は亡父が気に入っていたもので、当時小学5年だった私と妹達に毎日朗読を命じたものです。
今はもう覚えませんが、これを見るたびに暗誦しようとする自分がいます。



更に不思議なのは、我が娘が命じてもないのに、この詩を見る度に暗誦しようとすることで、親子3代の奇妙な縁を感じます。

さて、私はこの詩の解釈について父と話した記憶がありません。ただ「テクノボウ」という言葉が新鮮で、子どもながらに魅力を感じる詩でした。欲得にまみれない純朴な大人も目指しなさいと父は言いたかったのだらうと回っていました。ところが最近になって、この詩には齊藤宗次郎というモデルが存在することを知らず、考えが一変します。
花巻市に住んでいた齊藤氏。クリスチャンという理由で迫害された教職を失い、9歳の娘は「耶穌」とイジメられ、おなかを蹴られたことが原因で命を失います。

見舞い、雪の積もる日は小学校への道を雪かきしたそうです。そして彼が花巻から京都へ引越すことになった時、駅には迫害していたはずの大勢の人々が見送りに訪れ、その中には宮沢賢治もいたといっています。

宗次郎こそ遠く、二人の間には友情があって、この詩が生まれたという話です。
そういう背景を知って、この詩を読み返すと、「純朴」という言葉では言い尽せない強い使命感、人としての在り方を感ぜざるを得ません。
そして改めて父が私に望んだ人物像に思いを馳せる今日この頃です。



たかの財形事務所
〒819-0374 福岡市西区千里 707-13
☎090-3407-2123
<https://www.takanozaikai.com> メール fp.takano@gmail.com

いつも応援してくれて有難うございます。